

## まえがき

本書は、内堀基光先生から教えを受けた学生の有志による論文集である。本書のタイトル「人＝間の人類学（じんかんのじんるいがく）」は、内堀（以下、敬称は略する）の目指す人類学が何より、人間存在の根源的な成り立ちを明らかにすることに向けられており、また、その方法論として、人や「もの」のあいだの関係のありようを問うことを一貫して重視していることに因んでいる。また副題にある「内的関心」とは、個別の問題設定を方向付け、それへの接近方法を形作る、いわばメタレベルに位置する関心を意味している。「人＝間の人類学」とは、この内的関心のあり方を一言でまとめたものである。もっとも、内堀自身が自らの学問をこのように総括したわけではない。内堀の著した諸々の論考、あるいは、ゼミや講義での語り口や手振りを振り返った時に、上に述べたような在りようが示されているのをわたしたちが見て取り、それを仮に名づけてみたのである。

内堀自身の具体的な研究は、時間軸に沿って「死」「民族」「もの」という三つのテーマを軸に展開してきた。これらのテーマの背後には共通して、「もの」と「もの」、人と「もの」、あるいは人と人が「接合」し「関係」しあうこと、そしてそれゆえに、関係の項たる人間存在が容容していくことへのまなざしの存在を指摘できる。わたしたちも、そのような内的関心をゼミや論文指導の場を通して、多分に誤読を含みつつ共有し、各自のフィールドで展開してきた。（ここでいう誤読とは、読者の独自性なり個性を反映したものであり、同時に当初は想定されていなかった可能性をもたらすという限りで、多少とも意義あるものと考えたい。）

以上の理解を踏まえて、本書は次のような5部構成をとる。

第1部のテーマは死である。個体の死への恐怖がどのようなものとして経験され、またそれが文化的にどう乗り越えられるかというのが、内堀の研究の初期における重要なテーマであった。梅屋は、死の影におびえながら飲酒にのめり込んで行くウガンダ人エリートたちの生き様を記述することを通して、ポスト植民地期アフリカにおける現地人エリートの苦悩とジレンマに光を当てている。いわば、死を機会に露となる人の孤独の在りようを描き出している。西本は、ラオスのカントゥ社会の人々が死者の霊からの呼びかけに支配されながら社会生活を送っている様子を記述することを通して、生前身近だった人々が死後の存在に変換されることにより、不可視の世界と生者の世界を媒介する位置付けを与えられていると論じる。

内堀は、死の恐怖が、他者の死に自己の死すべき運命を見て取る人間の想像力に由来することを説いた。こうした想像力は、他者を自己に置き換えるものであり、集団を構成する契機となる。死の恐怖は、人間的な集団の構成を可能にする想像力が生み出し、同時に、その想像力は死の恐怖を乗り越える営みを可能にするものでもある。死を論じることは、個体を越えて集団構成の問題へ、本書では、2つ目のテーマである民族をめぐる想像力の問題へとつながっていく。

第2部では、民族という意識の集合性を形作る実践に焦点を合わせる。これは内堀が抽象した民族の発生／消滅の動態モデルを、「もの」と身体的実践に満たされた具体的な生活の場で検証する作業でもある。山口は、インドネシア・ブトン島のワブラ社会の巡礼儀礼をとりあげ、生活世界の諸所に見出される歴史の標識（「もの」）と、儀礼を通じた歴史と秩序の再現・再確認が、自らが語る歴史の「真実さ」、さらにはワブラ人の歴史的同一性を支える根拠になっていることを論じる。渥美は、カナダの先住民サーニッチにおける、いわゆるポトラッチに相当する儀礼（スィョクウェアム）の過程を分析し、それが勲功獲得に向けた競争的消費であるというよりも、死者への追憶を通して人々の集合的なつながりを再確認する機会になっていることを描き出している。

第3部には、自己と他者の境界のせめぎあいを対象とする論文が取られている。人と人、人と人以外の存在物のあいだの関係を基礎づけている「関係の文法」とでもいうべきものがテーマとなる。ここでは、

自己と他者や、人と人以外の存在物の関係の揺らぎに焦点が当てられる。吉田は、パプアニューギニアのアンガティーヤ社会における「心」(マアロオ)の概念を検討し、情緒がいかに分節されているのかの素描を試みている。ここでは、情緒を、他者(世界)との相互作用の中で生起する自己変容の経験として捉え、アンガティーヤにおける「自己」の成り立ちが考察される。奥野は、人間が動物をからかうと荒天に見舞われるという、ボルネオ島の狩猟民プナンの「雷複合」の観念を検討し、そこに人と動物の連続性を分節し、両者の境界を維持するメカニズムの働きを読み取っている。そして、そうしたメカニズムが人間中心主義の陥穽を回避する方略になっていると論じる。

第4部は、内堀の近年のテーマである「もの」論を扱う。中野は、インドネシアの中でもとりわけ豊かになったバリ社会を席卷する競争的消費行動(ゲンシー)を、「もの」の体系との関係に注目して分析しつつ、人々が、「もの」を自由に操作するのではなく、むしろ厳然とそこにある「もの」の秩序にしたがって消費競争を繰り返している様を描いている。深田は、パプアニューギニアのトーライ社会における貨幣の支払い方に注目し、「もの」としての貨幣の特質とその取り扱いの実践を通して、記号・象徴としての貨幣があらわす価値の秩序がリアルなものとして実演・生成されることを論じている。両論考を通じて主張されるのは、「もの」が人の意思によって容易に制御できるようなものではなく、むしろ「もの」との不断の交渉から生成される世界の中で人は生きていかざるをえないということである。

第5部のテーマは接合である。人と人、人と「もの」が関係するということは、人がたまたま居合わせて、共有する場を作り上げ、そして再びその場を離れ、あらたな関係の網の目の中に入っていく過程として理解できる。関係の存在は、不確定性=未来への開放性を伴う事態なのである。本書のタイトル「人=間の人類学」の「間」は、まさに関係が持つこの性格を表現したものである。「もの」と「もの」、人と人が並立した時に生じる「間=あいだ」は、何ものにも満たされていない、未来へ開かれた空間に他ならない。

第5部の二つの論考は、このようにたまたま居合わせ、関係を結び、場を共有するという偶発的な事態を人々がいかに生きているのかをめ

ぐる具体的な記述から構成されている。辛嶋は、取引費用という概念に着目して市場に肉を売りにいくモンゴル遊牧民の取引行動を分析し、取引相手の選択に際して以前に取引した商人を「知っている人」として扱い、その商人との取引を継続させることでリスクの回避を試みていることを明らかにする。エレナは、サラワクの客家社会で、ある男性が伝統的には女性の役割とされる結婚の仲介役として活躍している事実に着目する。彼は「パンクンマ（半男半女）」とあだ名されているが、その境界性が人のあいだを結びつけ、かつ、この属性ゆえに共同体の伝統の存続にも貢献していることを論じている。

民族誌の実践とは、場の偶然の共有から始まるプロセスであり、同時に経験の具体性を常に拠り所とする営みであるに違いない。その限りで、第5部に至ることは、人と人、人と「もの」、「もの」と「もの」が関係を結ぶ際の具体性に根ざす人類学の出発点へと回帰することをも意味しているだろう。

2010年2月  
共編者

人=間の人類学——内的な関心の発展と誤読◎目次

## 第1部

# 死

### 第1章

## 酒に憑かれた男たち

ウガンダ・アドラ民族における酒と妖術の民族誌 …………… 梅屋 潔 15

オボウォの「埋葬儀礼」(イキロキ *yikiroki*) / 呪詛で酒が手放せなくなった男 /  
バジルの死とアディンの病 / モダニティの邪術

### 第2章

## 死霊と共に生きる人々

ラオス・カントゥ社会における死の位相 …………… 西本 太 35

きれいな死と悪い死 / 不可視の世界に関わる死の原因 / 三つの霊魂 /  
死者の行方 / 死霊と生者の交流 / 死霊のまなざし

## 第2部

# 民族

### 第3章

## インドネシア・ブトン島ワブラ社会の歴史語り の民族誌

巡礼、農事暦儀礼と「真実の歴史」 …………… 山口 裕子 59

農事暦儀礼とワブラの1年 / 巡礼儀礼と「真実の歴史」 /  
聖地への時間の旅 / 生きられる歴史語り

## 第4章

# ポトラッチの行方

カナダ北西海岸先住民サーニッチのスイョクウェアムと

死に関する民族誌的「情報」…………… 渥美 一弥 81

ポトラッチについて／スティウィアレ(祈り)とマクゥアイーネレ(葬儀)／  
死に関する民族誌的「情報」／スイョクウェアム(燃やすこと)／結束

## 第3部

# 関係

## 第5章

# 自己と情緒

アンガティーヤ社会におけるマアロオ(「心」)概念の素描…………… 吉田 匡興 105

心としてのマアロオ／無意識の不在とその含意／  
アンガティーヤ的「意識」と情緒／情緒と自己の「拡大」／  
情緒的な経験としての生

## 第6章

# ボルネオ島プナンの「雷複合」の民族誌

動物と人間の近接の禁止とその関係性…………… 奥野 克巳 125

失敗した獵と「怒りのことば」／天候の激変に向き合う／  
動物と人間との近接というポニャラ／動物と人間の関係性／  
プナン的な自然との関わり

## 第4部

# もの

### 第7章

## バリにおける消費競争とモノの階梯的世界

中野 麻衣子 145

「平らになった」社会とゲンシー：バリにおける消費社会の出現／  
モノによる人間表象：モノと人間との関係／階梯化されたモノの世界／  
モノの階梯を登ること：社会的上昇と「進歩」

### 第8章

## トーライ社会における貨幣の数え方と払い方

深田 淳太郎 167

調査地の概要／タブの多様な形態と計量方法／タブを支払う方法／  
測ることにおける行為と物質の重要性

## 第5部

# 接合

### 第9章

## 取引費用の引き下げ方

モンゴル遊牧民と市場 ..... 辛嶋 博善 191

モンゴル遊牧民にとっての市場／市場への道のりと取引の事例／  
取引費用の引き下げ方／  
取引相手の固定度と新たな取引費用の引き下げ方の可能性

第10章

*Pàn kung mâ*—the Matchmaker of Tabidu

Managing Ambiguous Identity ..... Elena Gregoria Chai Chin Fern 211

Concord of marriage in the village / *Môi nżyn* / Marriage rites /

*Pàn kung mâ* / Biography of Mr. Bong /

Matchmaker as preserver of traditions

あとがき.....227

執筆者紹介.....228



第1部

死

## 第1章

# 酒に憑かれた男たち

ウガンダ・アドラ民族における酒と妖術の民族誌

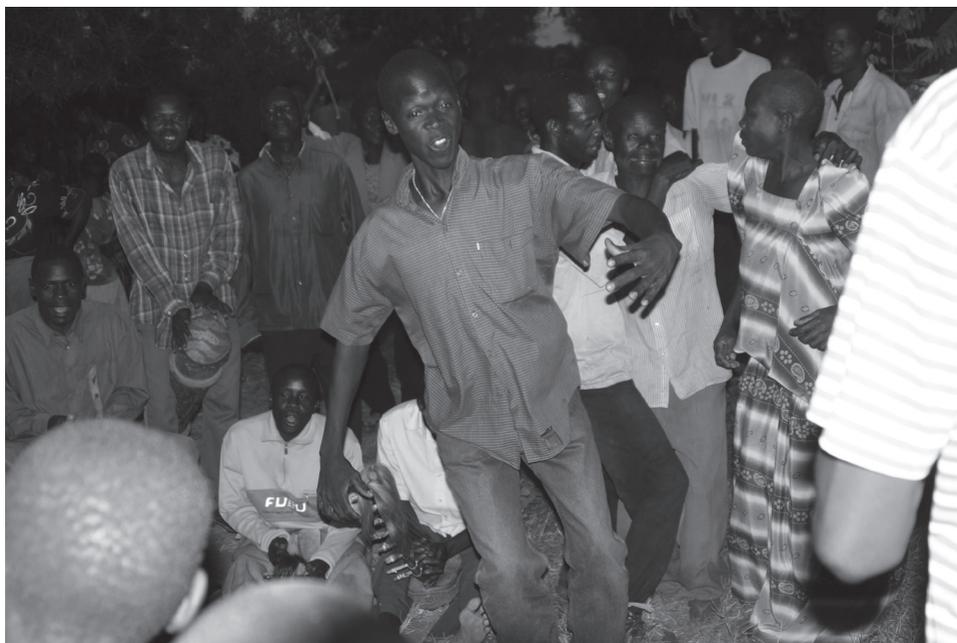
梅屋 潔

ひーっ、ひーっ、という数名の男女の叫び声が夜の静寂を引き裂いた。これは死を伝える悲しみのユールレイション<sup>1)</sup>である。それに続いて、とん、とん、とんと太鼓の寂しい音が響き渡る。音の調子でこの地域で一般的なロングドラム、フンボ *fumbo* ではなく、胴の短い葬儀用ドラム、ブリ *buli* であると知れた。私は足下を照らすためにかすかに炎を燃やすように絞った、つけっぱなしの灯油ランプを頼りに、かんぬきと鍵をあけて小屋の扉を開いた。音のする方向に耳を澄ます。2001年7月24日、23時30分ごろのことである。

「また、誰かが死んだのだ」私は、小屋の戸を開けて方角を確認し、1キロほど離れた小屋からの声だと確信して、改めてシュラフにもぐりこんだ。小屋に住んでいるのはかねてから病を得ていた人物で、2、3日まえから容体が悪化し、寝込んでいたはずだった。

朝方に、隣人のワンデラに、昨夜飲みすぎ（メド・マ・ラーチ *medhoma rach*）で死んだ人がマゴロ村にいる、と聞かされた。「やっぱりそう

写真……酔って踊り歌う。週末にはよくみられる光景





写真……葬儀のときに呼ばれる楽団は、夕方酒を囲むことも活躍する

か」私は得心した。ワンデラは、最寄りの診療所の医療に常時携わっているメディカル・アシスタントで、近隣では「ドクター」と呼ばれていた。そばにいた宿舎の管理人、バジルが、「何時かわからないけど、今朝は鶏が鳴く前に人の泣き声をした」という。方向で、死んだのはオポウォと推測した。「病気だったし、食べずに飲んでばかりいたから」と付け加えた。バジルによれば、他人の死を知る手続きは、およそ4つあるという。すなわち、悲しみのユールレイションであるンドゥリ *nduri*、方角の特定、死を知らせる太鼓ブリ、そして死の知らせを伝える使いを出すこと（ルウォンゴソ *luwongotho*）である。よそ者の私に察しがつくくらいである。その全てが満たされるのに時間はかからなかった。オポウォと親戚関係にあり、看病していた隣人が知らせに立ったのである。

## I オポウォの「埋葬儀礼」(イキロキ *yikiroki*)

翌日、私はオポウォの埋葬儀礼に立ちあった。そこで私は1997年にアドラ民族 *Adhola*<sup>2)</sup> の間で現地調査を開始して以来、はじめて飲酒に

対する否定的な見解を見聞きした。それまでの印象では、地域としても  
国としても飲酒に対して寛容な社会に映っていたのだ。平日でも少し日  
が傾くと、コンゴ（地ビール）の壺を囲む姿があちこちで見られる。週  
末ともなれば、あちこちでグループができ、時には酔っ払った老婆同士  
が半裸で掴み合いをしていることもあった。夕方コンゴの壺を囲むこと  
は社交の一環とみなされ、喧嘩や傷害などの社会的秩序に反する行為に  
結びつかない限りにおいてはそれ自体後ろ暗いことではないはずだった。

埋葬儀礼を含め、死者に関わる行事をカリエリ *kalieli* というが、カ  
リエリがあるときは、地域の誰もが、どこでそれが行われるのか周知して  
いるのが普通である。カリエリは、村の生活の最優先事項のひとつなの  
だ。参列のため正装姿で歩く人びとの道行きを辿っていくと、オボウォ  
の屋敷に着いた。

泣き声が聞こえる。屋敷に入って、1,000UGX（ウガンダシリング）  
のペサ・マ・キカ *pesa ma kika*、ガンダ語 Luganda ではマブゴ *mabugo*  
と呼ばれる金銭<sup>3)</sup>を係の男たちに渡し、記帳する。ノートは二種類あ  
る。ひとつはノノ *nono* つまりクラン・メンバーたちの記帳するものであ

写真……「オボウォのようになるな」と演説するムロコソ



り、もう一方はモニ *moni*、近隣のひとびとが記帳するものである。クラン・メンバーでない私は、モニに記帳した。金は村レベルの行政組織で管理しているようだった。

私がカメラを持っているのを認めると家人は小屋に招き入れた。撮れ、というのだ。埋葬儀礼に参列した私には遺体の写真を撮影することが求められていた。改めて家人に乞われもして、遺体の写真を撮影した。

ペンテコスタのムロコレ *mulokole*<sup>4)</sup> が、やおら立ち上がって説教を始めた。曰く「オボウォは、日曜日に教会に来なかった。盛り場で飲んばかりいた。何も食わずにだ。彼が残してくれた教訓を大切にしよう。飲むのなら、きちんと食べなさい。」

訃報を遠方で聞いたのか、たった今到着したばかりの女性が、屋敷の真ん中で泣き崩れた。

こうした中でも、オボウォを埋葬する墓穴は着々と掘られ、小屋の入り口のの前には自転車で町から運び込まれた棺が置かれている。

かん、かん、かん、かん…と打楽器の甲高い音がして、楽団が演奏を始めた。女たちがそれに合わせて身をゆらしはじめる。アジョレ *ajore* である。「悲しみと苦痛に満ちた心」というような意味で、女たちの踊りもそう呼ばれることがある。死んだ者の靈魂（ジュオギ *juogi*）を、新しい世界で平穏な状態にする方法であると説明されることもある。昔は近隣部族との紛争から帰った男たちがこれを演奏することになっていたという。戦いで仲間を失うことも多かったからである。また、新たに戦いを始めるときにもこれが演奏された。「ダウィ・オニンド *dhawi onindo*」つまり、戦いがまだ終わっていないことを表明するためである。

楽団は、堅い板に木製のばちを打ち付ける打楽器テケ *teke*、フンボという名のロングドラム、弦楽器トンゴリ *tongoli* からなっている。楽団の歌に合わせ踊る女たちも歌詞を口ずさむ。

…*wotomeran!* / *thwodhe oromo gi wadi yokoro* / *aa, aa, mama dhawi onindo kaa!* / *woto meran!* / *thwodhe oromo gi wadi yokoro* / *achulo banja machago akitimo!* / *wano kwongere gi yamo* / *kere dhawi onindo! olelo! olelo!* / *wodi mama kodhwoko, kere otho!* /

*dhawi onindo kaa! olelo! olelo! / kere banja! kere banja! / dhawi onindo kaa! olelo! olelo! / wano kwongere giyamo / dhawi onindo ochulere banja / nyath pa mama igalo kune mogwangi kayan ayino? / Opowo (この部分は死者の名に置き換えられる) kodwoko kere banja! / aa, aa, mama kere banja, dhawi onindo! …*

[邦訳] …きょうだいよ! / その戦いは、雄牛たちとそこで / ああ、ああ、母よ、また戦いがここに! / きょうだいよ! / その戦いは、雄牛たちとそこで / 経験したことの無いような痛みを受けた / 我々は死を呪う / その戦いがまた! オレロ! オレロ! (すすり泣く擬態語) / 私の母の息子は戻ってこなかった、死んだのだ! / その戦いがまたここに! オレロ! オレロ! / 痛み、そう痛みのため! / その戦いがまたここに! オレロ! オレロ! / 我々は死を呪う / 戦いはひとびとに経験したことの無い痛みをもたらす / そこから帰りの遅れた母の子は、野獣にでもやられたか? / オポウォは(戦いから) 戻ってこなかった、痛みのため! / ああ、ああ、母よ、かつてない痛みがここに、戦いはすでにここまで来た! …

あちこちで女性たちがすすり泣いている声が聞こえる。困ったとき、悲しいときに女性がとる、頭の後ろに手をやるしぐさや、後ろ手をくむ姿勢で悲しみのため体をねじっている女性たちがいる。

小屋の中から聞こえる泣き声がさらに大きくなる。最後の別れをしているようであった。しばらくすると順に小屋から泣きながら出てくる。

男たちが「右が下だぞ」と言い合いながら遺体を棺に移し始めた。男の埋葬のときは右肩が下で、女性の埋葬のときは左肩が下になるように埋葬する。性交のときの正常位なのだそうである。女たちは泣きながら見守っていた。

棺に遺体を納め終わった直後に、それに間に合わなかった若い女性が小屋に飛び込んできて最後の対面を求めた。牧師や信者たちによって彼女の哀願は厳かに退けられ、彼女は小屋の外で背を向けて泣いていた。

ワンデラ氏が太鼓を叩き、賛美歌とともに棺は屋敷の中央に設けられたシェードに運び出された。男性の信者によって賛美歌と祈願が捧げられる。